

きな潮流が〈ジャンル〉の相貌を露わにするかもしれない。しかし、そこで生成する〈ジャンル〉が既知のそれであるとは限らない。そういう知の冒険を試みることに。

この試みを、今度は論文集という形で展開しようとしたのが本書である。その際、一つの象徴として、〈源氏物語〉という山括弧付き表示を用い、書名にも採用した。〈源氏物語〉は広く「源氏物語的なもの」を指す。書名に込めた意図は、古代の言説の海の中から「源氏物語的なもの」が生成する、その動的諸局面を見さだめよう、ということである。ジャンルとしての〈源氏物語〉の生成と言ってもよい。したがって、本書に含まれる諸論文は必ずしも実的文献としての『源氏物語』のみを扱うものではない。また、執筆者には、〈源氏物語〉とは何か、という問いを問いつけることが求められた。そうして、それぞれの〈源氏物語〉の生成について思索すること。本書はそのような営みの結実である。

本書の企画・立案は、阿部好臣・上原作和・岡部隆志・津田博幸で行い、津田が編集実務を担当した。なお、シンポジウムの記録については「古代文学会公式ホームページ」を御覧いただきたい。

古代文学会叢書 Ⅲ

〈源氏物語〉の生成——古代から読む——

目 次

序……………津田博幸……………1

黄泉国訪問神話と源氏物語……………岡部隆志……………1

——イザナキを見失う六条御息所——

「手」と譜と——〇世紀の音楽をめぐる言説……………猪股ときわ……………19

《琴の譜》の系と回路——物語言説を浮遊する音……………上原作和……………48

王の庭園——『うつほ物語』吹上巻から『源氏物語』胡蝶巻へ……………西本香子……………76

『宮柱』考——『源氏物語』における〈日本紀〉生成——……………稲生知子……………102

日本紀講からみた『源氏物語』……………津田博幸……………128

——仮名で書くことをめぐって——

秘匿された〈歌〉の位相……………阿部好臣……………154

——『源氏物語』若紫・あるいは歌の父母——

一条天皇の辞世歌「風の宿りに君を置きて」……………坏美奈子……………198

——「皇后」定子に寄せられた〈御志〉——

現代の批評理論は、どうして『源氏物語』に適用可能なのか？

——『源氏物語』と「表象」代行「機能」——……………助川幸逸郎……………221

黄泉国訪問神話と源氏物語

岡部隆志

——イザナキを見失う六条御息所——

本稿のテーマは、古事記と源氏物語を比較しようというものであるが、影響関係を云々するという試みではなく、古事記の物語性と源氏物語の物語性にどのような共通性があるかを見てみようというものである。紫式部が日本書紀を読んでいたことは知られているが、古事記についての程度読んでいたのか、別にそのことを検討するというわけではない。ただ、表現の歴史という観点から見れば、日本書紀に比べて物語性の強い古事記の方が、源氏物語に豊かな物語の富をもたらしたか、もしくは共に豊かな物語の富を共有したことは確かである。その富とはどのようなものだったのか。とりあえずその一端でも明らかにできればよい。

古事記と日本書紀との違いは大きいが、特に神話の部分で目立つのは、イザナキとイザナミの神話であろう。古事記では、イザナミは火の神カグツチを生むことで死んでしまう。比婆の国に葬られるが、イザナキは黄泉の国のイザナミに会いに行く。が、「見るな」と言われたにもかかわらず、イザナミの「うじたかれころきて」という腐敗した死体を見てしまい、逃げ出す。見ら

日本紀講からみた『源氏物語』

津 田 博 幸

— 仮名で書くことをめぐって —

源信僧都又勤此事（『法華八講』 説云。日本国者誠雖如来金言唯以仮名可奉書也。

〔『河海抄』 第十二「梅枝、江談云」〕

一 「日本紀」へのリンク

周知のことだが、「蜩」巻の光源氏のことばに、『源氏物語』と「日本紀」との明示的リンクがみえる。すなわち、

「…このごろ幼き人の、女房などに時々読まするを立ち聞けば、ものよく言ふ者の世にあるべきかな。そらごとをよくし馴れたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれどさしもあらじや」とのたまへば、「げにいつはり馴れたる人や、さまざまにさも酌みはべらむ。ただいとまことのこととこそ思ふたまへられけれ」とて、硯を押しやりたまへば、「骨なくも聞こえおとしけるかな、神代より世にあることを記しおきけるななり。日本紀などはただかたそぼぞ

かし。これらにこそ道々しくはしきことはあらめ」とて笑ひたまふ。

（新編日本古典文学全集による）

はじめ「物語」など「そらごと」だとくさしていた光源氏は、玉鬘の痛烈な反撃を受けて、一転して物語をもちあげる。そのときに「日本紀」が引き合いに出されて「ただかたそぼぞかし」ときおろされる、という次第である。この一連のやりとりが作者の物語観を反映しているなどとは言えないにしても、少なくとも次のことは言えよう。すなわち、——光源氏は「日本紀」を読んだことがある。

では、いつどこで読んだのだろう。『源氏物語』は十一世紀初頭からみて「いづれの御時か」と言われる、十世紀中のどこかの時代の話である。そうである以上、光源氏は宮廷の日本紀講で「日本紀」を読んだのだ、と考えるべきだろう。平安前期の宮廷ではほぼ三十年に一度『日本書紀』の講義が行われた。十世紀中には、延喜、承平、康保と三度に渡って開催されている。^③十世紀の日本紀講は大臣以下の堂上貴族が揃って聴講する儀式であったから、そのどれかの講筵に源氏も列なつたはずである。十一世紀初頭の『源氏物語』読者はそう理解したことだろう。

こうして、「日本紀」が参照項目として、テキストのいわば隣に召喚される。明示的なリンクと言ったのは、この意味である。「神代より世にあることを記しおきけるななり」とか、「これらにこそ道々しくはしきことはあらめ」という光源氏の物語評価の発言は、「日本紀」を参照するこ